

# マルティン・シェルバーを探して…

トーマス・マイヤー＝フィービツヒ

私は今、国立音楽大学で「作曲家作品研究」という授業を担当しています。前期の授業では、「リストとブラームスの人生と、人生に於ける作品」というテーマを中心に、受講学生の皆さんと共に考察してきました。

先日も授業の準備のために国立音楽大学の図書館からブラームスとリストについての本を何冊も借りてきました。この図書館には、国内の出版物はもとより私が母国語で読める最新の書籍や資料までが大変豊富にそろっています。彼らについて調べていますと、その人柄や作品だけではなく、自然と多くの作品のジャンルにまでも興味の対象は広がります。そんな中、私は必然と「交響曲」という作品のジャンルについても調べ始めました。

簡単な検索方法としては、インターネット百科事典のウィキペディアがあります。このサイトを閲覧していますと次から次へと知りたいことが沢山出てくるため、遭難する事もよくありますが…。今回は、ドイツ語ウィキペディアの「交響曲」の項目を読んでいたら、「マルティン・シェルバー (Martin Scherber)」という、全く耳慣れない人名が目に入りました。ウィキペディアのリンクを辿り「マルティン・シェルバー」の項目を読みますと、音楽家としてとても興味深い人物であり、なぜ、今までこの人の名前を聞いた事がなかったのかも思いました。反面、他のインターネットのサイトを調べてみますと、この人の作品についての批評が、全く180度反対と言っている程分かれてもいます。どのような作品が、これ程までに意見を分けさせるのか是非知りたいと私は思うようになり、遂にブラームス・リストはそっちのけでシェルバーを探し出すようになりまして。

なかなか知られていない作曲家の名前なのですが、イン

ターネットでダウンロードができる交響曲を見つけ、聴きましたところ、言葉では言い表しようのない不思議な素晴らしいさを覚えました。後期ロマン派の伝統を受け継ぐものの、その後の近代の感覚をも含み、それ以上に深い精神世界、そして心の底からの響きを感じさせる音楽なのです。しかし。

これが1950年代に作曲された作品ということを考えてみると、当時の音楽界に受け入れられなかったことも、理解できない訳ではありません。この時代には後期ロマン派の厚みのある響きはもう、時代遅れだとされていたのです。それにも関わらずこの作曲家は、時代遅れと言われようとも、自分の心が響くまま自分に正直な作品を幾つも書き上げたのです。

是非、総譜も見てみたい。しかしファクシミリでしか存在していないものです。買いたくても、そう買えるものではない筈です。どこで入手できるものか、楽譜屋さんのサイトを探しまわりました。

ところが。

無駄を承知で覗いてみた国立音楽大学図書館蔵書の中に、なんと、このマルティン・シェルバーの交響曲第3番のファクシミリがあつたのです。灯台下暗し、とは、このことでした。

図書館の扉は開かれることを待っています。本や楽譜は紐解かれるのを待っています。一つ扉を開ければ、又、幾つもの扉が開かれるのを待っています。そして、音楽家の心は、魂の響きが解き放たれる機会を待ち望んでいます。本が書かれた紙や音が録音されたメディアは物体としては無機質のものです。しかし、そこに含まれた無限の可能性を解き放つためには、みなさんの新しいものに対する好奇心と、音楽家としての心が一番必要なのです。